

【原著論文】

日本のバスケットボール競技における
ファストブレイクに関する史的研究
—1930年代のルール改正とコートの大さに着目して—

小谷 究¹⁾

A historical study on the fast break of basketball in Japan:
Focused on the revised rules in 1930s and the size of the court

Kiwamu Kotani¹⁾

Abstract

The purpose of this study is to clarify the adoption of the fast break and its actual usage in Japan during 1930s, when the most common offense was the set offense, after considering the rules and the size of the court mainly on the college basketball game.

The results of the study can be summarized as follows.

The set offense, an offense which slows a game down, was often used as an offensive strategy in the late 1920s to early 1930s. However, due to the adoption of 10 second rule in 1932, the speed of the game became faster. Moreover, in 1935, due to the elimination of the center jump after succeeding free throw, as well as 2 years later in 1937, another elimination of the center jump after succeeding field goal, the game was restarted by a throw-in from the end-line and quick throw-in made it possible to attempt fast break.

From these revised rules, the fast break had been adopted from mid 1930s. At that time, three lane fast break had been adopted as a basic fast break. The college basketball game was held at the court of YMCA Tokyo, where the distance between the goals was short, however, the longer distance court was newly established in 1933. Since then, using this new court for the tournament made it easier to exert the effectiveness of the three lane fast break.

Key words : tactics, offense, defense

キーワード：戦術， オフェンス， ディフェンス

I. 問題の所在

ボールゲームでは、戦術^{注1)}がゲームの遂行において決定的な役割を果たす¹⁾。バスケットボール競技もこの例に漏れず、戦術が非常に重要な役割を担う。しかし、バスケットボール競技の戦術の歴史について研

究した大川²⁾は、今日において具体的な体系化がほとんどなされていないために、一つの戦術をとっても、それがどの系統に属し、類似する戦術が何であるのかさえまったくわかっていない状況にあることを指摘しており、この問題を解決する手立てとして、過去の戦術を洗い出し、歴史的に体系化することをあげている。

1) 日本体育大学
Nippon Sport Science University

また、バスケットボール競技を含むボールゲームの戦術はルールとともに発展してきたことから³⁾、戦術の歴史をルールの側面から検討することが重要な視点となる。

さて、バスケットボール競技におけるオフェンス戦術はファストブレイクとセットオフェンスにそれぞれ大別される。セットオフェンスは、チームがボールを保持した後、ゆっくりとボールを前のコートへ進め、5人のプレイヤーの組織的な協力により、ボールをバスケットに投げ入れることを目標とする戦術であり⁴⁾、ファストブレイク^{註2)}は、チームがボールを保持した後、速い展開でアウトナンバーの状態を組織的に構築し、バスケットへボールを投げ入れることを目標とするものである⁵⁾。従来、走力・敏捷性・スピードを最大限活かした、平面的でハイペースなバスケットボールを志向してきた日本では、ファストブレイクを用いたプレイスタイルが基盤となっており、今後もそのスタイルを合理的で効率的なものとして高めることが必要とされている⁶⁾。そこで、本研究では日本におけるファストブレイクについてルールの視点から歴史的に検討することにしたい。

ここで、日本におけるバスケットボール競技の歴史を紐解くと、1913(大正2)年、日本YMCA同盟の体育事業専門主事の派遣要請に応え、アメリカからFranklin H. Brown(1882-1973)が来日したことを契機として、バスケットボール競技の本格的な伝播と定着がはじまった⁷⁾。Brownは、神戸、京都、横浜、東京とそれぞれのYMCAを通じてバスケットボール競技の普及につくしたため、競技移入後の日本のバスケットボール競技はYMCAを中心に行われ⁸⁾、1921(大正10)年から開催された全日本選手権大会においては、第1回から第3回大会まで東京YMCAが3連覇を成し遂げた^{註3)}。その後、1925(大正14)年開催の第5回大会での東京YMCAの優勝を最後に、学生チームの優勝が続き、しだいに日本のバスケットボール競技の本流は、YMCAから大学へと移っていった⁹⁾。そこで本研究では、全日本選手権大会、明治神宮大会、関東大学リーグ戦、東西学生対抗といった当時のバスケットボール競技の本流であった大学のチームが出場したゲームを中心に検討することにしたい。

日本のバスケットボール競技における戦術の変遷については、小谷¹⁰⁾が1920年代初期の日本では、フロントコート^{註4)}に残っているプレイヤーにロングパスを出すことにより、速い展開で攻撃するスリーパー・オフェンスが用いられていたものの、1924(大正13)年に早稲田大学が採用して以降、多くのチームがバック

コート^{註5)}で5人によるディフェンスを行う3-2ゾーンディフェンス(以下「3-2ゾーン」と略す)を採用するようになり、スリーパー・オフェンスを使用することができなくなったことを明らかにしている。また、日本におけるバスケットボール競技のファストブレイクについて歴史的に研究した谷釜¹¹⁾は、昭和初期の指導書では主なファストブレイクとして、スリーパー・オフェンスとスリーレーン・ファストブレイク^{註6)}が解説され、その利点が十分に認識されていたものの、技術的な問題、競技空間の問題、ルール上の問題により、ファストブレイクが実際の試合で使用されるのは稀で、ボールの獲得後5人揃った状態でゆっくりとパスを回しながらハーフコートでスローテンポな攻撃を展開するセットオフェンスが全盛であったことを明らかにしている。さらに、及川¹²⁾によれば1935(昭和10)年になると、ひとつのチームがファストブレイクとセットオフェンスのどちらも用いるようになったという。これらの研究によって、昭和初期にファストブレイクが採用されなかった要因が示され、1935(昭和10)年頃にファストブレイクが採用されるようになったことが明らかにされている。しかし、セットオフェンスが全盛であった日本のバスケットボール競技においてファストブレイクが採用されるようになった要因とその実際について歴史研究の視点から詳細に検討したものは管見ながら見あたらない。

そこで本研究では、バスケットボール競技のセットオフェンスが全盛であった1930年代の日本でファストブレイクが採用されるようになった要因について大学のゲームを中心にルールの視点とコートの大きさから検討したうえで、ファストブレイクの採用とその実際について明らかにすることを目的とする^{註7)}。これによって、日本におけるファストブレイクの展開過程が明示されれば、前述した戦術の体系化に向けた一助となり得ると考える。

なお本課題の検討にあたり、1930年代に発行されたバスケットボール競技の規則書、「籠球」¹³⁾といった雑誌、「アサヒ・スポーツ」¹⁴⁾や「体育と競技」¹⁵⁾などのバスケットボール競技について掲載されているスポーツ雑誌を主な史料として用い、記述内容を分析した。

II. ファストブレイク採用の要因となったルール改正

表1は、本研究の対象期間に行われた日本におけるバスケットボール競技の主なルール改正である^{註8)}。以下にファストブレイク採用の要因となったルール改

表1. 1930年代の主なルール改正

年	名称	主な変更点
1930	昭和5年度バスケットボール競技規則	コート大きさ縦25m60cm × 横14m63cm
1932	昭和8年度バスケットボール競技規則	3秒ルール・10秒ルール採用
1933	昭和8・9年度バスケットボール競技規則	3秒ルールの制限の追加／10秒ルールの制限の追加
1934	昭和9・10年度バスケットボール競技規則	コート大きさ縦27.5m × 横15m
1935	昭和10・11年度バスケットボール競技規則	フリースロー成功後のセンタージャンプ廃止／3秒ルールの制限の追加
1937	昭和12・13年度バスケットボール競技規則	3秒ルール廃止／フィールドゴール成功後のセンタージャンプ廃止
1938	昭和13・14年度バスケットボール競技規則	コート大きさ縦26m × 横14m／フリースロー成功後、一旦審判がボールを保持

正ついで解説する。

1. 10秒ルールの採用

1935（昭和10）年頃の日本において、ファストブレイクが採用された要因のひとつとして10秒ルールの採用があげられる。日本では、1932（昭和7）年施行の『昭和8年度バスケットボール競技規則』において「バック・コートに於てボールを得たチームは10秒以内にボールをセンター・ラインより前方へ進むべし」¹⁶⁾という10秒ルールが採用された⁹⁾。

この10秒ルールはストーリングを防止するために規定されたものであるが¹⁰⁾、これによりゲームの展開が速くなったようである。大日本バスケットボール協会の設立に尽力し、設立後は協会の理事としてバスケットボール競技のルールの設定や技術の研究・普及等に努めた李想白は、「新規則の10秒ルールがひきた後、プレーぶりが一體に攻め足の速くなつたのは事実のやうです」¹⁷⁾と述べている。また、1933（昭和8）年発行の「籠球」には、第9回関東大学リーグ戦2部リーグ東京農業大学と中央大学との対戦において両軍チームが「基礎技術の拙劣さ」を示したことについて「10秒ルールはここにも亦攻撃の速くなつたことを證している」¹⁸⁾と記述されている。さらに、大日本バスケットボール協会役員を務めた坂勘造が第9回関東大学リーグ戦について「新10秒規則の適用は速攻を餘儀なくせしめて、各チーム共得点及失点を増加して居る」¹⁹⁾と評しているように¹¹⁾、10秒ルールの採用により、ゲームの展開が速くなった¹²⁾。

2. フリースロー成功後のセンタージャンプの廃止

10秒ルールの採用はゲームの展開を速くするものであったが、1935（昭和10）年にフリースロー成功後のセンタージャンプが廃止されたことは、ファストブレ

イクを試行する機会を増加させるものであった¹³⁾。

1930（昭和5）年施行の『昭和5年度バスケットボール競技規則』ではフリースローについて「ゴール成らばボールはセンターに於てインプレイとせらる」²⁰⁾と規定され、フリースロー成功後はセンタージャンプによってゲームが再開された。

しかし、1935（昭和10）年施行の『昭和10・11年度バスケットボール競技規則』において「パーソナル・ファウルによるフリー・スローのゴール成らば、ボールはフリー・スローが成されたるゴールのエンド・ライン外の任意の地点より、フリー・スローを成したる相手方チームによりイン・プレイとせらる」²¹⁾と改正され、パーソナルファウルによるフリースロー成功後はエンドラインからのスローインによってゲームが再開されるようになった。フリースロー成功後のセンタージャンプの廃止について、1935（昭和10）年発行の雑誌「体育と競技」では以下のように記述されている²²⁾。

「籠球規則は毎年改正されて居るが今度の改程有効であつたと思はれるものは恐らくあるまい3秒ルール、フリースロー後のジャンプの廃止は確にゲームをスピーディーにし、ゲームに活気を添へて来た。…フリースローのジャン（ジャンプ一引用者注）廃止により、攻撃の一重要な場面が展開して来たことも事實である。フリースロー後の速攻撃、確に研究に價する十分のものがあると信ずる」

このように、フリースロー成功後のセンタージャンプが廃止され、エンドラインからのスローインでゲームが再開されたことにより、エンドラインからのスローインを素早く行うことで、ファストブレイクを試

みることが可能になった²¹⁴⁾。ただし、1938 (昭和13) 年施行の『昭和13・14年度バスケットボール競技規則』では「パーソナル・ファウルによるフリー・スローのゴール成らば、審判によりボールはフリー・スローを成したる相手方チームに渡され、イン・プレイとせらる²³⁾」と加えられ、フリースロー成功後は一旦審判がボールを保持することになったため、スローインまでにタイムロスが生じることとなり、ファストブレイクを試行することが難しくなったといえる。したがって、フリースロー成功後のセンタージャンプが廃止されたルール改正は、ファストブレイクの試行について数年間しか効力を発揮し得なかった。

3. フィールドゴール成功後のセンタージャンプの廃止

フリースロー成功後のセンタージャンプが廃止された2年後の1937 (昭和12) 年には、フィールドゴール²¹⁵⁾ 成功後のセンタージャンプも廃止され、ファストブレイクを試みる機会はさらに増加した。1930 (昭和5) 年施行の『昭和5年度バスケットボール競技規則』ではフィールドゴール成功後のゲーム再開について、以下のように規定されている²⁴⁾。

「各ゴールの後…各センターは兩足にてセンターサークルの自己の半圓上又は半圓内に立つべし。而してレフリーは兩センターの間にてサイドラインと直角をなす平面に於てボールが双方の飛び得るよりも高く昂がり且つ兩者の間に落ち来るやうに之れを投げ上ぐべし。ボールは最高點に達したる後一方又は双方のセンターによつて打たるべきものとす」

このように、1930 (昭和5) 年のルールでは、フィールドゴール成功後はセンタージャンプによりゲームを再開することが規定されていたが、1937 (昭和12) 年施行の『昭和12・13年度バスケットボール競技規則』において「野投成功後はゴールが成されたるゴールのエンド・ライン外の任意の地點より、野投を成したる相手方チームよりイン・プレイとせらる。この場合審判は自らボールを處理する要なし²⁵⁾」と改正された。この改正により、相手チームのフィールドゴール成功後にファストブレイクを企てることが可能になった。

大日本バスケットボール協会の理事を務めた大村泰三は「センタージャンプの廃止は攻撃に於ける長身者チームの不當なる有利さを制限する反面に於てゲームのスピード化を目的としたもので有るから當然攻撃

プレーの積極性が促進せられるので有り本年度リーグに於ても先づ第一に此の傾向が窺知せられた²⁶⁾」と述べている。また、雑誌「籠球」の座談会において李は「去年一年日本も競技規則が變つて、エンドラインからゲームを始めるようになったために、思はず知らず猫も杓子も、少くとも速攻の氣持に蔽はれてゐた²⁷⁾」と述べており、同年発行の「アサヒ・スポーツ」においても「改正新規則の重點は中央跳躍 (フィールドゴール成功後のセンタージャンプ—引用者注) と3秒規則の撤廃にあるから、これに應ずべき對策は速攻とポストプレーにあるべきが當然であるが、一般が速攻の意圖に傾注してか、後者の選擇を全く閑却した²⁸⁾」と述べている。さらに、大村は第17回全日本選手権大会について「競技規則の大改正後における最初の選手権大會であるので、その試合内容には數々の新傾向が盛られ、殊に攻撃における積極性の促進は期せずして速攻の全盛となり²⁹⁾」と述べている。このように、フィールドゴール成功後のセンタージャンプが廃止されたことにより、相手チームのフィールドゴール成功後にファストブレイクを企てることは可能になったが、それでもゴール成功後にファストブレイクを仕掛けてどのくらい成功したかは疑問の残るところである。

III. ファストブレイクの採用とその実際

1. スリーレーン・ファストブレイクの採用

昭和初期のオフェンス戦術はセットオフェンスが全盛であったが³⁰⁾、10秒規則の採用、フリースロー成功後のセンタージャンプの廃止、フィールドゴール成功後のセンタージャンプの廃止により、1930年代中頃よりファストブレイクが採用される土壤ができあがった。1936 (昭和11) 年開催の第13回関東大学リーグ戦について早稲田大学 OB の芦田伸三は「攻撃法の新傾向としては速攻法の採用を擧げることが出来る。速攻法は從來餘り顧られず、今までリーグ中では専ら立教が獨占の型であつたが、今シーズンに至つて速攻の起用が急激に盛況を示して、明大を除く他は殆んどこれを用ひてゐた³¹⁾」と述べており、1937 (昭和12) 年開催の第16回全日本選手権大会についても「積極的プレイが多かつた。例へば早稲田、京都、明治等内地の代表チーム (チーム—引用者注) が期せずして速攻法を考慮に入れて來た³²⁾」と述べている。さらに、早稲田大学 OB の牧山圭秀は「現在大學専門級の7割、中等學校の9割迄、速攻に主力を置いてゐる³³⁾」と述べており、明治大学 OB で大日本バスケットボール協会の設立に尽力した妹尾堅吉は「近來の傾向として遅攻

法に代はつて、速攻法全盛になつてきた³⁴⁾と述べている。このように、日本では1930年代中頃より速攻が採用されるようになった。

それでは、引用中の速攻（法）とは今日我々が理解するファストブレイクと同義なのであるのか、この点に関して谷釜³⁵⁾は、昭和初期の指導書で説かれていた主要なファストブレイクであるスリーパー・オフenseとスリーレーン・ファストブレイクは、オフense側がディフェンス側よりも多人数で攻撃を仕掛けられる、すなわちアウトナンバーの状態を作り出せる工夫が施されていたことを明らかにしているが、「籠球」には1933（昭和8）年頃のゲームについて以下の記述が残されている³⁶⁾。

「敵の速攻の蹂躪に委ねね（委ね—引用者注）
て尚ほ氣付かざるが如き、扱てはガードはガードで攻撃側多数の故、負けるが當然と心得ている如き策のなさ、大學チームに於てさへ斯くの如きを見るは唯だ唯だ驚くのみ、ファスト・プレート（ファストブレイク—引用者注）に對しては第1線の1人或ひは2人が速かに帰へつて防禦すべきは籠球常識A・B・Cとも云ふべきも、又一方2人のガードで3人でも4人でもの敵を多少なりとも持ちこたへ時には、その裏を搔き得るはガードのガードたる所以」

また、雑誌「体育と競技」には「ファストブレイクは、その主要目的として、敵の防禦が同数の人員を以つてバスケットを守る事が出来ない内、少くとも1人以上の人を得点可能地域に行かせる…テンポ速く攻撃するもの³⁷⁾と定義し、1935（昭和10）年に開催された第14回全日本選手権大会における準決勝以上の試合を分析した論考が掲載されており、全得点中、ファストブレイクによる得点の割合は19.14%であったとしている³⁸⁾。このように、実際のゲームのなかで使用されたファストブレイクも速い展開のなかでアウトナンバーの状態を作り出すものであったことが理解できることから、当時の速攻（法）は単に速い攻めを意味するのではなく、今日我々が理解するファストブレイクであったことがわかる。

前述したように、当時の指導書で説かれていた2つの主要なファストブレイクのうち、プレイヤー1人をフロントコートに残すスリーパー・オフenseは、1920年代中頃から3-2ゾーンの普及に伴い用いられなくなった³⁹⁾。この状況は1930年代に入ってから変わらず、1933（昭和8）年発行の「アサヒ・スポー

ツ」において李は「此システム（スリーパー・オフense—引用者注）は5人攻撃制が進歩した今日では4人を以て防備の完全を期することができないために餘りよく使はれなくなりました⁴⁰⁾と述べている。

一方、スリーレーン・ファストブレイクは当時の基本的なファストブレイクとして採用されていたようである。当時発行された雑誌の戦評には、1932（昭和7）年開催の第9回関東大学リーグ戦において東京帝国大学⁴¹⁾、1933（昭和8）年開催の第10回関東大学リーグ戦、1936（昭和11）年開催の第13回関東大学リーグ戦において東京商科大学がスリーレーン・ファストブレイクを用いたとの記述が残されている⁴²⁾。

さらに、李はスリーレーン・ファストブレイクについて「スリー・レーン・オフenseと称して、速攻法中最基本的初歩的なものとされている⁴²⁾と述べている。1935（昭和10）年発行の「籠球」には「ゴール下でボールを得るや直ちに3路整然と進む速攻法は、速攻のオーソドックスとでもいふもの⁴³⁾との記述が残されている。これらのことから、当時は基本的なファストブレイクとしてスリーレーン・ファストブレイクが採用されていたといえる。

2. スリーレーン・ファストブレイクの有効性を発揮しやすくしたゴール間の距離が長いコートの新設

1930年代中頃より基本的なファストブレイクとしてスリーレーン・ファストブレイクが採用されるようになったが、ゴール間の距離が長いコートが新設されたことは、当該戦術の有効性を発揮しやすくするものであったようである。コートのサイズについて、『昭和5年度バスケットボール競技規則』には、高等専門学校及び大学程度のチームが使用するバスケットボールコートの理想的なサイズは「長さ2560糎（84呎）（25m60cm）幅1463糎（48呎）（14m63cm）」⁴⁴⁾とされている⁴⁵⁾。しかし、1930（昭和5）年頃に開催された全日本選手権大会や関東大学リーグ戦、東西学生対抗戦で主な試合会場として使用された東京YMCAの体育館に設置されたコートは⁴⁶⁾、「長さ70呎（21m33cm）、幅40呎（12m19cm）」⁴⁵⁾と、ゴール間の距離が短いものであった⁴⁷⁾。

このようなゴール間の距離が短いコートでは、スリーレーン・ファストブレイクを行うことは難しくなる⁴⁸⁾。図1は、今日使用されているファストブレイクについて解説したものである。スリーレーン・ファストブレイクでは、図1に示すようにフロントコート、バックコートの3ポイントラインのトップを目安にコートを3分割し、それぞれのエリアで狙いをもって

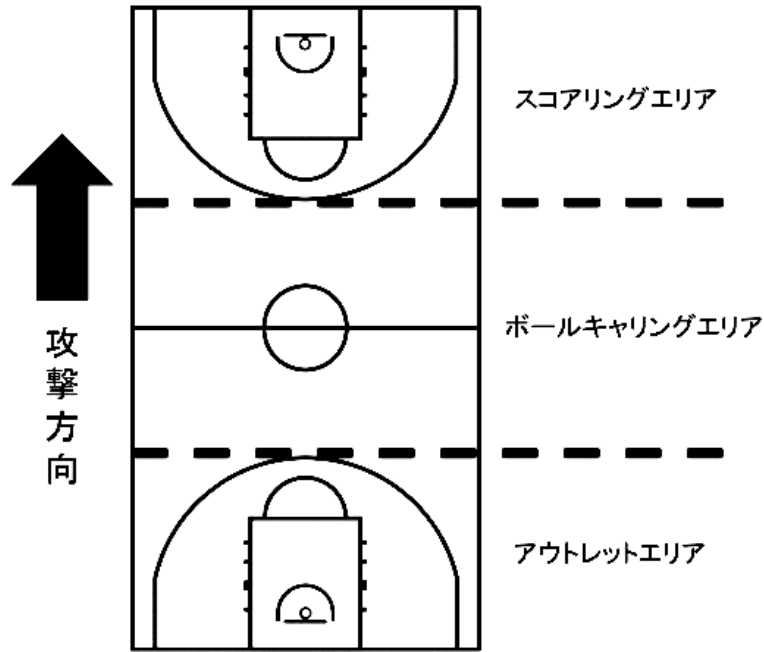


図1. ファストブレイクにおけるコートのエリア区分

(日本バスケットボール協会強化本部エンデバー委員会編 (2011) エンデバーのためのバスケットボールドリル4. ベースボール・マガジン社, p. 122より作成)

動くことになる⁴⁶⁾。

アウトレットエリアでは、ディフェンスリバウンド獲得後いち早くパスを出すことで、ファストブレイクの体勢を整え、ボールキャリングエリアではボールをスピーディーに前進させてオフェンス側が数的に有利な状況を作り、スコアリングエリアでシュートを狙い、得点することになる⁴⁷⁾。しかし、ゴール間の距離が短いとスリーレーン・ファストブレイクでは、ボールキャリングエリアが短くなり、ボールをスピーディーに前進させていくなかで数的に有利な状況を作ることには難しくなる。このことについては大川⁴⁸⁾も、スピードによる相手との時間的・空間的差によって攻撃を行うファストブレイクにとって、コートの大さはまさにそれを成立させるための前提条件となるとし、ファストブレイクが成立するためには、ある程度のコートの広さが必要であるとしている。

つまり、ゴール間の距離が短い東京YMCAのコートでは、ボールをスピーディーに前進させていくなかで数的に有利な状況を作り、それを維持する時間が短くなることから、スリーレーン・ファストブレイクの有効性を発揮することが難しくなる。雑誌「ATHLETICS」には、1931(昭和6)年に開催された第8回関東大学リーグ戦について、以下のような記述が残されている⁴⁹⁾。

「コートの狭いことは速攻法の本當の技術を發

現するに六ヶしく、又その本當の美麗な機構を觀賞するにも不便であつた。コートが正規の大きさにあればもつともつと此機構が有効に採用されるであらう」

また、李は1931(昭和6)年のバスケットボール競技界について「速攻に就ては現在コートが狭くこの技術の展開に未だ十分の餘地ある」⁵⁰⁾と述べている。さらに、早稲田大学OBの土肥一雄は1932(昭和7)年に開催された第9回関東大学リーグ戦について「コートの短き關係上、目立つ程速攻法が用ひられなかつたのは當然であつた」⁵¹⁾と述べている。このように、1930年代初頭に開催された大学のゲームが、ゴール間の距離が短い東京YMCAのコートで行われたことは、スリーレーン・ファストブレイクの有効性を発揮し難くするものであった。

しかし、日本では1920年代中頃から高いパフォーマンスを発揮するためにルールで規定された最大限のコートサイズでゲームを行うことが求められるようになり⁵²⁾、1933(昭和8)年にはゴール間の距離が長い「縦が84呎(25m60cm)、幅が50呎(15m24cm)」⁵³⁾のバスケットボールコートが明治神宮外苑相撲場に新設され⁵⁴⁾、その後開催された関東大学リーグ戦、全日本選手権大会の試合会場として使用された^{注21)}。「籠球」には、1937(昭和12)年開催の第14回関東大学リーグ戦でのフィールドゴール試投数の増加について

「コートの大いさ（大きさ—引用者注）の變化，規則の變更，それらに伴つて，速攻を意圖する機會の多くなつたこと等の理由によるものであらう」⁵⁵⁾と記述されている。このように，ゴール間の距離が長いコートが新設され，大学のゲームにおいて使用されたことは，スリーレーン・ファストブレイクの有効性を發揮しやすくするものであった。

IV. まとめ

本研究における検討の結果は，以下のように整理することができる。

昭和初期のオフェンス戦術は，ゆっくりとスローテンポな攻撃を展開するセットオフェンスが全盛であったが，1932（昭和7）年に10秒ルールが採用されたことによりゲームの展開が速くなった。さらに，フリースロー成功後及びフィールドゴール成功後はセンタージャンプにより始められていたゲームの再開が，1935（昭和10）年にフリースロー成功後のセンタージャンプが廃止され，2年後の1937（昭和12）年にはフィールドゴール成功後のセンタージャンプが廃止され，ゲームの再開がエンドラインからのスローインで始められたことにより，スローインを素早く行うことで，ファストブレイクを試みる事が可能になった。

これらのルール改正により，1930年代中頃よりファストブレイクが採用されるようになった。当時は，基本的なファストブレイクとしてスリーレーン・ファストブレイクが採用されていた。それまでの大学のゲームは，主にゴール間の距離が短い東京YMCAのコートで行われたが，1933（昭和8）年にゴール間の距離が長いバスケットボールコートが明治神宮外苑相撲場に新設され，その後に開催された関東大学リーグ戦，全日本選手権大会の試合会場として使用されたことは，スリーレーン・ファストブレイクの有効性を發揮しやすくするものであった。

〈 注 〉

注1) スポーツ運動学において「戦術」とは，「行動の結果を考慮して，最も合目的に目的を達成する方法」（金子明友（1990）運動学講義，大修館書店，p.275）を意味するものとされ，試合中に起こりうる具体的な行動に関わるという点で，戦略から区別される。また，嶋田は「戦略」を「敵の存在を前提として，その敵を打ち負かすことを目的とした総合的な目標，方針」，「戦術」を「その目標を達成するための具体的な手段，方法」（嶋田出雲（1992）バスケットボール勝利への戦略・戦術，大修館書店，p.1）と定義している。さ

らに，稲垣らは「戦法」について戦略や戦術などの諸概念を包括したものと定義している（稲垣安二・荒木郁夫・北川勇喜・上平雅史・武井光彦・進藤満夫（1985）球技における戦法の基本概念に関する一試論，日本体育大学紀要，14（2）：6）。以上に示した定義をふまえ，「戦術」とその他の類似概念との区別を重視する本研究では，「戦術」の語を「敵を打ち負かすという目的に向かい，試合中にとりうる具体的な手段・方法」と定義し，論を展開していくこととする。

注2) ファストブレイクの誕生については大川の研究が詳しい。

大川によると，アメリカでは1900（明治33）年のルール改正で，「ドリブルからのショット」が禁止されたことにより，センターが常時ゴール下にいる「バスケット・ハンガー」となってロングパスを受け取り，両フォワードがゴールに切れ込んでショットする最初のファストブレイクである「スリーパー・オフェンス」が展開されるようになった（大川信行（2006）バスケットボールのファストブレイク誕生までの経緯，体育史研究，（23）：65）。

注3) このことに関連する史料として以下のものがあげられる。

- ・荒木直範（1922）バスケットバレーボール大会印象記，ATHLETICS，1（5）：35-37
- ・日本バスケットボール協会広報部会編（1981）バスケットボールの歩み，日本バスケットボール協会，p.614
- ・西村正次（1923）バスケットボール代表権は東京青年会組に帰す，ATHLETICS，2（4）：132-139

注4) 「フロント・コートとは，相手チームのバスケットのうしろのエンド・ラインからセンター・ラインの近いほうの縁までのコートの部分」（日本バスケットボール協会審判・規則部編（2011）2011～バスケットボール競技規則，日本バスケットボール協会，p.11）とされる。

注5) 「バック・コートとは，自チームのバスケットのうしろのエンド・ラインからセンター・ラインの遠いほうの縁までのコートの部分」（日本バスケットボール協会審判・規則部編（2011）2011～バスケットボール競技規則，日本バスケットボール協会，p.11）とされる。

注6) スリーレーン・ファストブレイクとは「コートを縦に3つの地域に区切り，味方がボールをキャッチするや否やそれぞれの区域を1人ずつ走らせ，ボールをパスしながら前のコートへ進め，フリースローラインまで進めた後，両サイドを走る味方へパスしショットとさせたり，あるいは自分でショットしたり，バスケットの下へドリブルで進みショットする」（稲垣安二編著（1978）バスケットボールの指導体系，粹出版，p.130）ファストブレイクとされる。

注7) 本文中の引用文における漢字，仮名づかい，送りがなは，原則的に原文のままとする。ただし，引用文中の漢数字は算用数字に変換し，フィートで記されている長さは1フィートを30.48cmに換算し，小数点以下を切り捨て，括弧をつけて記す。また文献のタイトルの漢字は，常用漢字に改める。

注8) 1936 (昭和11) 年発行の「籠球」では、日本は「從來殆んど米國流規則を採用 (極少部分を除いて) してゐる」(李想白 (1936) 国際会議を中心として: FIB 伯林会議に出席するの記. 籠球, (18): 48-49) と述べられており、『昭和12・13年度バスケットボール競技規則』においても「從來は概ね米國新規則に準據して改正を加ふる慣例なり」(大日本バスケットボール協会編 (1937) 昭和12・13年バスケットボール競技規則. 大日本バスケットボール協会, p.4) とされているように、当時の日本のルールは、概ねアメリカのものを採用していた。

注9) 大川によると、10秒ルールはアメリカにおいて横行していたディフェンスのいないところでボールを回して時間稼ぎを行う「ストーリング」という遅延プレイの対策として1932 (昭和7) 年に規定された (大川信行 (2013) バスケットボールの10秒ルールに関する史的研究: 1940年代までのルールの変遷からみて. 北陸体育学会紀要, (49): 16)。

注10) 日本では、1930 (昭和5) 年開催の第7回関東大学リーグ戦において立教大学 (小林豊 (1931) 8 大学籠球リーグ戦: 第5週. ATHLETICS, 9 (1): 109), 1931 (昭和6) 年開催の第10回全日本選手権大会において千葉医科大学 (浅野延秋 (1931) 第10回全日本男子総合選手権大会. 籠球, (1): 13), 1931 (昭和6) 年開催の第8回関東大学リーグ戦において東京帝国大学 (鈴木俊平 (1931) 関東大学籠球リーグ戦展望. アサヒ・スポーツ, 9 (27): 20), 1932 (昭和7) 年開催の第11回全日本選手権大会において早稲田大学がストーリングを使用したという記述が残されている (鈴木東平 (1932) 第11回全日本男子総合選手権大会. 籠球, (3): 77; 想白生 (1932) 第11回全日本籠球選手権大会私評. ATHLETICS, 10 (3): 117)。しかしながら、李が「それ (ストーリング—引用者注) によつて勝つたチームに対する一般の輕蔑非難は、容易にそのチームをして再び斯かる不徳のプレーを繰返へさしめないだけの力を持っているやうに思はれる。我々のプレーヤー (プレーヤー—引用者注) なりコーチなりは公論の不利を恐れる、又更に深く云へば為すべからざる背徳的不公正な作戦によつて勝つことを欲しない根本意識があるやうに見える。それ故に日本に於けるストーリングなるものはセイゼイディレード・オフENS (ストーリングとは異なりシュートを打つ戦術—引用者注) の度の稍々強いものでしかなく、それも競技終末に時偶見える程度だ」(李想白 (1932) アレン博士と会見して. 籠球, (5): 25-26) と述べていることから、1930年代の日本においてストーリングは使用されていたものの、多用されることはなかったと推察される。

注11) 今日の文献において「ファーストブレイク (速攻) [fast break]」(ジェリー・クロウゼ編: 水谷豊他訳 (1997) バスケットボール・コーチング・バイブル. 大修館書店, p.554), 「fast break [ファスト・ブレイク] …速攻を示す」(倉石平 (2005) バスケットボールのコーチを始めるために. 日本文化出版, p.228), 「ファスト・ブレイク Fast break…速攻法のこと」(櫻井榮七郎編 (1998) 球技用語事典. 不昧堂出版,

p.556), 「ファースト・ブレイク (Fast break) 参照→速攻」(浅田隆夫編 (1988) スポーツ用語辞典. 成美堂出版, p.369) とされているように、今日のバスケットボール競技では「ファストブレイク」と「速攻」の用語が同義語として用いられている。当時の日本のバスケットボール競技においても文献のなかで「速攻法 The Fast Break」(李想白 (1930) 指導籠球の理論と実際. 春陽堂, p.485), 「速攻法 (Fast Break)」(大日本バスケットボール協会編 (1933) ガードナー籠球講習要録. 動文社, p.61), 「ファスト・ブレイクオフENS (速攻)」(エヴァレット・S. ディーン (1936) インディアナ・バスケットボール (2). 籠球研究, (9): 6) と記述されているように「ファストブレイク」と「速攻」の用語は同義語として用いられており、当時の日本では「ファストブレイク」の用語も用いられていた。

注12) 10秒ルールの他に『昭和8年度バスケットボール競技規則』では、3秒ルールが採用された。『昭和8年度バスケットボール競技規則』では「競技者がフリースロー・レーンの中に於て、バスケットに背を向けて球を持ち立ちたる場合は、3秒以上之を保持する事を得ず」(大日本バスケットボール協会編 (1932) 昭和8年度バスケットボール競技規則. 大日本バスケットボール協会, p.61) と所謂3秒ルールが採用された。3秒ルールは、1933 (昭和8) 年施行『昭和8・9年度バスケットボール競技規則』において「競技者が自己のバスケット側のフリースロー・レーンの中に於て、3秒以上之を保持する事を得ず。立止りてボールをバウンドする事はボールを保持するものと認む」(大日本バスケットボール協会編 (1933) 昭和8・9年度バスケットボール競技規則. 大日本バスケットボール協会, p.87) と規定され、「バスケットを背にすると否とに拘はらず、フリースロー・レーン中に於いては凡てボールを3秒以上保持することは許さないことになった」(大日本バスケットボール協会編 (1933) 昭和8・9年度バスケットボール競技規則. 大日本バスケットボール協会, p.15)。さらに、1935 (昭和10) 年施行の『昭和10・11年度バスケットボール競技規則』では「ボールを有するチームの競技者はイン・ブレイク中自己のバスケット側のフリー・スロー・レーンの中に3秒以上立入ることを得ず」(大日本バスケットボール協会編 (1935) 昭和10・11年度バスケットボール競技規則. 大日本バスケットボール協会, p.83) と規定され、ボールの保持に関わらず3秒以上フリースローレーン内にとどまることができなくなった。しかし、ファストブレイクは速い展開でオフENSを行うことから、3秒ルールの影響をほとんど受けなかったようである。池上は、1937 (昭和12) 年発行の「籠球」において「3秒ルールは速攻を妨がんとするものでなく又妨げるものでない」(池上虎太郎 (1937) 攻撃法4型. 籠球, (20): 6) と述べており、3秒ルールは1937 (昭和12) 年施行の『昭和12・13年度バスケットボール競技規則』より廃止された (大日本バスケットボール協会編 (1937) 昭和12・13年度バスケットボール競技規則. 大日本バスケットボール協会, p.10)。

注13) 大川によると、アメリカでは1ゲームの得点が30点台であった時代に、このセンタージャンプで優位にボールを獲得できることは、そのままゲームの支配にもつながる重要な事柄であった。そのため、タップされたボールを奪い合う際に、不利なチームのプレイヤーは強引で粗暴なプレイになりやすく、1930年代になるとそれが問題となった。また、シュート成功後のセンタージャンプは、一旦ゲームを中断するために、その円滑な進行を妨げるものとして問題視されており、1935（昭和10）年にフリースロー成功後のセンタージャンプが廃止され、1937（昭和12）年にはフィールドゴール成功後のセンタージャンプも廃止された（大川信行（2009）バスケットボールのジャンプボールに関する一考察：創案から1940年代までのルールの変遷、人間発達科学部紀要、3（2）：68-69）。

注14) 及川によれば、フリースロー後のセンタージャンプの廃止により、ゲームがスピードアップすると考えた三橋はファストブレイクを推奨した（及川佑介（2008）オリンピック・ベルリン大会（1936年）における日本バスケットボールに関する史的考察、運動とスポーツの科学、14（1）：51）。

注15) フィールドゴールとは「フリー・スローの対語で野投といわれ、ショット可能地域からゴールへ投射すること」（櫻井榮七郎編（1998）球技用語事典、不味堂出版、pp.559-560）とされる。

注16) このことに関連する史料として、以下のものがあげられる。

- ・中野生（1934）リーグ戦を顧みて、オリムピック、12（1）：60
- ・妹尾堅吉編（1934）籠球、（9）：97
- ・芦田伸三（1937）関東大学リーグ戦総評、籠球、（19）：26
- ・菊池次郎（1937）立教対商大、籠球、（19）：33

注17) 高等専門学校及び大学程度のチームが使用するバスケットボールコートの実験的なサイズは1934（昭和9）年に縦27.5m、横15mに拡大され（大日本バスケットボール協会編（1934）昭和9・10年度バスケットボール競技規則、大日本バスケットボール協会：東京、p.5）、1938（昭和13）年に「競技場の廣さを『長さ26米（26m）幅14米（14m）』を正規と定む…正規の廣さを基準として長さは2米（2m）、幅は1米（1m）を増減することを得」（大日本バスケットボール協会編（1938）昭和13・14年度バスケットボール競技規則、大日本バスケットボール協会、p.5）と改定されるまで続いた。

注18) このことに関連する史料として、以下のものがあげられる。

- ・阪勘造（1930）8 大学籠球リーグ戦戦評、ATHLETICS、8（12）：82
- ・土肥一雄（1932）防御より見たるリーグ戦、籠球、（3）：17
- ・大道弘雄編（1932）昭和7年運動年鑑、朝日新聞社、p.239
- ・大道弘雄編（1933）昭和8年運動年鑑、朝日新聞社、p.273

注19) 大川によると、アメリカでは1896（明治29）年度か

ら1897（明治30）年度に3500ft²というコートの面積基準が採用された。このコートサイズは縦横の比率こそ多少の違いはあるものの、その面積に関しては現行のコートサイズ（縦24-28m、横13-15m）の下限値に匹敵し、十分にファストブレイクを行うことができた（大川信行（2006）バスケットボールのファストブレイク誕生までの経緯、体育史研究、（23）：55）。しかし、東京 YMCA の体育館に設置されたコートは、縦21m33cm と現行のコートサイズの下限値と比較してもかなり短いものであった。

注20) 小谷によるとスリーパー・オフenseはゴール間の距離が短いコートにおいてより有効に機能する（小谷究（2013）1920年代の日本におけるバスケットボール競技のファストブレイクに関する研究：スリーパー・オフenseの採用と衰退に着目して、運動とスポーツの科学、19（1）：74）。

注21) このことに関連する史料として、以下のものがあげられる。

- ・大道弘雄編（1933）昭和8年運動年鑑、朝日新聞社、p.269
- ・大道弘雄編（1934）昭和9年運動年鑑、朝日新聞社、pp.237-242
- ・大道弘雄編（1935）昭和10年運動年鑑、朝日新聞社、pp.222-224
- ・大道弘雄編（1936）昭和11年運動年鑑、朝日新聞社、pp.202-205
- ・大道弘雄編（1937）昭和12年運動年鑑、朝日新聞社、p.209
- ・森村廣（1937）関東大学リーグ2部戦評、籠球、（19）：37

〈文 献〉

- 1) シュテラー・コンツァック・デブラー：唐木國彦監訳（1993）ボールゲーム指導事典、大修館書店、p.70
- 2) 大川信行（2007）バスケットボールの戦術に関する歴史的研究（1891年から1945年まで）：男子アマチュア・バスケットボールを中心として、日本体育大学博士論文、pp.9-10
- 3) シュテラー・コンツァック・デブラー：唐木國彦監訳（1993）ボールゲーム指導事典、大修館書店、pp.23-24
- 4) 稲垣安二編著（1978）バスケットボールの指導体系、梓出版、p.126
- 5) 大川信行（2006）バスケットボールのファストブレイク誕生までの経緯、体育史研究、（23）：52-53
- 6) 日本バスケットボール協会エンデバー委員会編（2005）エンデバーのためのバスケットボールドリル3、ベースボール・マガジン社：東京、p.10
- 7) 薬師寺尊正（1927）バスケットボール、アルス文化大講座、4：7
- 8) 近藤茂吉（1921）バレーボールとバスケットボール、運動界、2（4）：65
- 9) 薬師寺尊正（1927）バスケットボール、アルス文化大講座、4：7-8
- 10) 小谷究（2013）1920年代の日本におけるバスケット

- ボール競技のファストブレイクに関する研究：スリーパー・オフENSEの採用と衰退に着目して. 運動とスポーツの科学, 19 (1):74
- 11) 谷釜尋徳 (2010) 昭和初期の日本におけるバスケットボールの速攻法について. 東洋法学, 54 (1):110-111
- 12) 及川佑介 (2008) オリンピック・ベルリン大会 (1936年)における日本バスケットボールに関する史的研究. 運動とスポーツの科学, 14 (1):52
- 13) 妹尾堅吉編 (1931) 籠球, (1) - (30)
- 14) 東口眞平編 (1930) アサヒ・スポーツ, 8 (12) -16 (3)
- 15) 大日本体育学会編 (1935) 体育と競技, 14 (11)
- 16) 大日本バスケットボール協会編 (1932) 昭和8年度バスケットボール競技規則. 大日本バスケットボール協会, p.61
- 17) 理想白 (1933) 籠球プレイシステム解説. アサヒ・スポーツ, 11 (3):33
- 18) 田中介 (1933) 東京大学リーグ戦2部ゲーム後期. 籠球, (6):65
- 19) 坂勘造 (1933) 公式記録に現れたる数字の統計. 籠球, (6):17
- 20) 大日本体育協会編 (1930) 昭和5年度バスケットボール競技規則. 大日本体育協会, p.42
- 21) 大日本バスケットボール協会編 (1935) 昭和10・11年度バスケットボール競技規則. 大日本バスケットボール協会, pp.74-75
- 22) 宮崎正雄 (1935) 新規則に基づく籠球の戦術. 体育と競技, 14 (11):68
- 23) 大日本バスケットボール協会編 (1938) 昭和13・14年度バスケットボール競技規則. 大日本バスケットボール協会, pp.74-75
- 24) 大日本体育協会編 (1930) 昭和5年度バスケットボール競技規則. 大日本体育協会, pp.30-31
- 25) 大日本バスケットボール協会編 (1937) 昭和12・13年度バスケットボール競技規則. 大日本バスケットボール協会, p.57
- 26) 大村泰三 (1938) 関東大学籠球リーグ戦総評. 籠球, (21):12-13
- 27) 理想白・芦田伸三・石澤清弘・三橋誠・大内哲彦・佐藤栄一・山井武夫 (1938) 早稲田大学比律賓遠征を語る座談会. 籠球, (22):41
- 28) 理想伯 (1938) 籠球. アサヒ・スポーツ, 16 (3):6
- 29) 大村泰三 (1938) 全日本籠球総合選手権男子は普成専門. アサヒ・スポーツ, 16 (3):21
- 30) 谷釜尋徳 (2010) 昭和初期の日本におけるバスケットボールの速攻法について. 東洋法学, 54 (1):110-111
- 31) 芦田伸三 (1937) 関東大学リーグ戦評. 籠球, (19):22
- 32) 芦田伸三・池上虎太郎・三橋誠・大村泰三・坂勘造 (1937) 全日本選手権大会合評会. 籠球, (19):40
- 33) 牧山圭秀 (1941) 最近の技術的傾向. 籠球, (29・30):18
- 34) 妹尾堅吉・池上虎太郎 (1941) 紀元2600年奉祝第11回明治神宮国民体育大会籠球競技を顧る. 籠球, (29・30):57
- 35) 谷釜尋徳 (2010) 昭和初期の日本におけるバスケットボールの速攻法について. 東洋法学, 54 (1):99
- 36) 宮城一郎 (1933) 近頃気にかかること. 籠球, (7):76-77
- 37) 竹内虎士 (1935) 籠球於けるシステムプレイの考察. 体育と競技, 14 (7):23
- 38) 竹内虎士 (1935) 籠球於けるシステムプレイの考察. 体育と競技, 14 (9):24
- 39) 小谷究 (2013) 1920年代の日本におけるバスケットボール競技のファストブレイクに関する研究：スリーパー・オフENSEの採用と衰退に着目して. 運動とスポーツの科学, 19 (1):74
- 40) 理想白 (1933) 籠球のプレイシステム解説. アサヒ・スポーツ, 11 (3):33
- 41) 土肥一雄 (1933) 東京大学リーグ戦評. 籠球, (6):61
- 42) 理想白 (1930) 籃球選手権競技. アサヒ・スポーツ, 8 (12):45
- 43) NI生 (1935) 日米大会の便り. 籠球, (14):78
- 44) 大日本体育協会編 (1930) 昭和5年度バスケットボール競技規則. 大日本体育協会, p.2
- 45) 日本バスケットボール協会広報部編 (1981) バスケットボールの歩み. 日本バスケットボール協会, p.583
- 46) 日本バスケットボール協会強化本部エンデバー委員会編 (2011) エンデバーのためのバスケットボールドリル4. ベースボール・マガジン社, pp.122-123
- 47) 日本バスケットボール協会強化本部エンデバー委員会編 (2011) エンデバーのためのバスケットボールドリル4. ベースボール・マガジン社, p.123
- 48) 大川信行 (2006) バスケットボールのファストブレイク誕生までの経緯. 体育史研究, (23):54
- 49) 想白生 (1932) 籠球リーグ戦随想. ATHLETICS, 10 (1):80
- 50) 理想白 (1932) 籠球界を顧みて. 大道弘雄編, 昭和7年運動年鑑. 朝日新聞社, p.237
- 51) 土肥一雄 (1933) 東京大学リーグ戦評. 籠球, (6):59
- 52) 小谷究 (2014) 日本のバスケットボール競技におけるファイブマン・ツーライン・ディフェンスに関する史的研究. 体育学研究, 59 (2):502
- 53) 報知新聞社 (1935) 籠球競技の見方(上). 報知新聞(市内版), (20952):3
- 54) 鈴木重武 (1933) 明治神宮新設籠球場について. 籠球, (6):6
- 55) 畑龍雄 (1938) 関東大学リーグ戦を数字より見る. 籠球, (21):21